

「人はなぜ『美しい』が分かるのか？」

2016年6月18日(土)

カフェミヤマ渋谷公園通り店 [1号室]

参加：15名

司会・文責：堀越

1. 概要：

- ・初参加者2名を含む総勢15名で、主に、思考実験で描かれる「美しさが見えない」という人に対して美しさを納得させるにはどうすればいいか、なぜ美しいが分かるのかという2つについて考え、対話を深めました。

2. 対話：

(0) 問いの提起

- ▶ 進行役より思考実験『美を見る』*1)を紹介し、そこに描かれる「美しさが見えない」という浩一という人物に美しさをどう納得させるかという問いを提起した。

*1) 「中学生からの対話する哲学教室」－『“美”は事実か趣味か』より

(1) 思考実験：「美しさが見えない」という浩一をどう納得させるか？

- ・「美しい」は感じるものである。ある対象を見せて美しさを納得させようとせず、どんなときに美しいと感じるかを問うべきではないか。人によっては、ある日の「大便の形を美しい」と感じることもある。

(2) 「美しい」をなぜ分かるのか？／過去の哲学者はどう考えたか？

- ・“美”には、①知識における判断と②主観に感動を伴う感受の2つがあるが、②には次の2種がある：
 - a) (神と会ったというように誰にでも感動を伴うと考えられる) 普遍的な経験
 - b) (普遍的ではなく) 個別的な経験。

- ▶ この意見が出たところで、過去の哲学者の主張の中から、ソクラテスの唱えた客観主義およびヒュームの唱えた経験主義*2)を簡単に紹介した。

*2) 「中学生からの対話する哲学教室」－『“美”は事実か趣味か』より

- ・2年前の本会で似た対話をしたが、その際の論点は、“美”は対象の中にあるのか、心の中にあるのか、であった。この点も留意したい。

- ・客観主義は「美の観念は普遍」という立場だが、普遍とは立証困難であり、それ故に反証不能である。

(3) 社会環境との関係について

- ・人は、誰でも社会の中に生まれ生きている。無人島で狼によって野生的に育てられるという特殊な場合を想定すると、その人が“美”を分かるかは疑わしい。能力に関わるのではなく、生育の環境(経験)が大きなポイントではないか。
- ・社会性や時代性によって美の観念は大きく変わっている。昔はおかめが美人であったし、ピカソの絵画の「美しい」「美しくない」の評価も変わってきている。江戸時代の美しさも今とは異なる。
- ・人間が何かを美しいと感じる基本的な能力・才能は生得的(生まれつき)かもしれないが、何に美しさを感じるかは(時代や社会により変化して)固定されず、個人によっても異なる。

(4) 美しいと感じる能力について

- ・何かを美しいと感じるには、成長や知的経験が必要となるのではないか。美しいと感じる能力は、(生物学的な原初感覚)より高次の感覚であり、それがまだ備わっていないとき人は、その対象に対して親和性(対象に惹き付けられること)を感じるだけではないか。
- ・社会との関係性によるという意見が出たが本当か。そういう関係性がまだない3~6才の子供でも(美しさと綺麗さが同じかは異論があるかもしれないが)綺麗という概念は分かる。これを親和性と呼んだ人がいたが、私は感覚値(=感覚の度合い)を持っていると表現したい。
- ・同じような意見だが、言葉を使っているから「美しい」を分かって使っているはずである。言葉は誰もが分かったつもりで使っている。
- ・果物は栄養価が高く、食糧難の際に栄養状態を飛躍的に回復できる。進化の歴史において原始時代ある果物を見つけるために、そこに咲く花に対して(美しいと思わなくとも)何らかの感情が湧いて、その感情を手掛かりにその場所を記憶できる個体が生存競争に有利だったとは考えられないか。

(5) 思考実験：「美しさが見えない」という浩一について(再び)

- ・浩一は「なんの美しさも見えません」と主張している。これは、何か自分の中に美しさの概念はあり、それと比べて「見えない」と言っていると考えられ、美しさを分かっているはずである。だから、このケースではなく、むしろ「何も美しさを分かっている」ケースを考えるべき。または、浩一に対して「あなたは何を美しいと思うのか」と訊くべきで、それは浩一でなくては分からないはずである。
- ・「分かる」とはその言葉を使うことができることを指す。その意味で、浩一は美しさを分かっている。
- ・「美しい」は幽霊に似ている。幽霊は万人が見たことがないが、誰もが言葉を使う。ここで言う幽霊とは、見たり感じたりした経験はないが、言葉や概念を分かる状態である。思考実験における浩一は、「美しい」を幽霊という言葉のように分かっているが、実際に感じたり、見たりしたことがないという意味である。
- ・「分かる」という言葉が誤解し易いので、把握(=何となく分かっている状態)と理解(本当に分かっている状態)に分けて考えたい。浩一は美しいを理解するには、心がドキドキ・ワクワクする体験が必要。これによって「美しい」という言葉をその体験に貼る(ラベリングする)ことができるようになるはず。

(6) 「美しい」をなぜ分かるのか？(再び)

- ・“美”には分かる人にしか分からない“美”があり、全員には分からないものである。素数や宇宙の本質を表す公式等に美しさを感じるには、そういう感性を持った人であろう。この感性は、後天的ではなく、間違いなく生得的で、センスとしか言いようがない。
- ・「美しい」は(体験したことがないと本当には分からないという意味において)恋に似ている。
- ・「美しい」という言葉の本質に迫りたい。だが、本質に迫ろうとすると(異論を切り捨ててしまうような)暴力性を伴うため危険性を感じる。一方でそうしないと、個々人により「美しい」の概念がバラバラとなってしまっていて一致は難しい。個人的意見では「醜い」が分かるから「美しい」が分かると思っている。

3. まとめ：

- ・(生得的な)感受能力と(後天的な)社会・環境による影響を分けて考え、「美”の基本的な感受性は生得的」および「(多くが美しいと分かる)何かを美しいと感じるには社会環境下の訓練が必要」という点に到達できた。
- ・進行役の個人的な意見として、「美しいを感じることは恋の体験に似ている」という主張を一步進め、「美しいを感じることは(自分に欠落した)何かを憧れる感覚ではないか」と考えたことを最後に紹介して会を閉じた。

以上